

---

月 刊

---

# MéLange

---

Vol.109

---



---

2016.01.31

詩と評論

---

月刊「MéLange」

Vol.109 2016.01.31

「月刊めらんじゅ」編集部

詩 & 俳句

詩人……………岩脇リーベル豊美 04

焼け爛れた家……………野口 裕 05

濁流丸……………黒田ナオ 06

Meditation de Thais ……………福田知子 07

詩の風景 ……………月村 香 08

まぶた ……………大橋愛由等 09

時間の行進 ……………大西隆志 10

雨を見たかい〜ケガをしたはなし…………… 富 哲 世 11

New Seasons 四つの季節 ② ……………中堂けいこ 12

きんかん ……………高谷和幸 13

〈雪中の見舞ひ〉冬二十句、テロ十句(俳句)……………高橋雅城 14

悪寒／野菜市 ……………中嶋康雄 15

連載エッセイ & 詩評

ひと言詩評〈12〉……………富 哲 世 03

神戸詞あしび98「六〇〇年忌を祀られる世之主という存在」……………大橋愛由等 16

編集部日より★30/さて2016年がスタートした。今年も、毎年一月に行く〈奄美ふゆ旅〉(1月18日〜21日)。沖永良部島、徳之島、奄美大島をめぐってきた。(わたしが神戸に帰って2日後、大島に115年ぶりとなる降雪が記録された)。それぞれの島では旧知の友人・知人たちに温かく迎えられた。わたしの奄美たびも21回を数えてようやくこの地域のありようを、わたしの言葉で表現できるようになった。継続性と積み重ねが産み出す果実は豊かである。わたしは愚直にものごとをかさねてゆくタイプで、ある回数を超えたとき、一気にその世界が視えてくるのである。/109回目となる「Melange」月例会。第一部の読書会は、高谷和幸氏の担当。テーマは「草野心平を読む」。今年も詩を語り、詩を想う一年がはじまる。〈大橋記〉

日和聡子 詩集『砂文』

あのころも どのときも 一緒には居なかつたから 今もそうです

互いに互いを知ることのない まだ会えなかつたあのころに戻って…… 誰揉みで熾した火を大事にあやした

あのころに戻って……

ころころうるさいな

もう 戻れないよ

(「古墳」部分)

に対する呼応がおそらく、この詩集のファタモルガーナ(蜃気楼)を要約する、「出会ってしまったら、もう戻れない。」(帯文)である。しかし、それは悔恨ではないだろう。

もの狂おしく、フェティッシュな「物神」の詩群だ。呪物崇拜とは、謂わば意味へと還元されてしまえず、意味を超えて感取されてしまうもの、意味と価値(音、物)が交差する、自意識の境界を往き来する現れへの注視であろうか。

詩集「びるま」から「虚仮の一念」まで、詩文に見えるその再現的描写力や物語の構築力の巧みさはすでに周知のことだが、それは単なる近世嗜好や人間主義を超えている。ここでも主役は誰彼の個ではなく、個が時のほさまに浮かび上がるもう戻れない(ものごと)のすがたなのではないだろうか。多分この詩人には、わたしたちの日々日常に潜む(異界経験)を掘り起こす感性が優れて備わっているのだと思う。例えば『遊泳』に見える陸とからだの、此岸と彼岸の鮮やかな転位。詩の臨場感はその接線上の異界感取に支えられ、それがどこかで九十九神や産砂の土着性へも血族しているのではないだろうか。であいがであわられてあるさま、ものごとが(わたし)を超えてあるありさま、時には門付け芸人のひとりの従者となつて、ある時には自然や事物の目覚めた艶なる化身のように、また幼女の魂に憑依しながら、もの憑きとなつて浮かび出す変容のありさま、それは逝くものが自分のイキと手で扉を押し開く、(独りである)ことの解釈学であるかもしれない。

(2015年10月 思潮社)

## ◆ 詩人

岩脇リーベル豊美

わたしは詩集を出していないので  
詩人とは呼ばれないが  
服従や革命や背信を経て  
ことばを棄てることなく  
人類に参加することになった

孤独な散歩者の言語起源論では  
ホモ・ソヴァージュに  
ことばを習得させるが  
木の実を採集していたころには  
なにか崇高と思われるものに礼拝していて  
実体としてなかった概念を翻訳する  
その行為は造語あるいは完璧なる誤訳

まさに権利  
まさに自由  
まさに恋愛

逃げるなど彼らはいう  
逃げずに火を消せ  
逃げてはいけない  
逃げる非国民  
逃げ遅れる非詩人

逃げ遅れるなどわたしはいう  
逃げる  
もつと遠くに  
もつと速やかに

心は砕かない  
心は砕けない  
わたしが心砕くことで  
存在が確認されると  
思う人間が  
地球上のどこかに数人はいる  
わたしは悲しむが  
わたしの心は砕けない

聖母の昇天には  
聖人なしにいち日を過ごした  
振り向くな デイオティマ  
商店街は華やかに福音の町で店を開ける  
さくらんぼの種の枕を購入し  
電子レンジで温めて眠る  
ホモ・ソヴァージュを慰めている

ある特殊な歴史的社会的条件下で  
孤立現象として発生する  
デジタル化した涅槃  
政治的な詩を書きたい  
釣りに行きたい  
茸狩りにも行きたい  
森に帰りたい  
逃げる詩人

## ◆ 焼け爛れた家

野口 裕

側面は円弧の年輪ありて  
側面ならざる矩形の板面に  
ぎざつぎざあつと堅い波づら  
内の柔らかな木質には  
太古の鏃 往時の刃傷  
みんなぼやけておかめひよつとこ  
そんな顔つきに見えぬこともない

植え替えられた豪族の家には空調が効き  
もうこれ以上腐肉を晒さなくともよい  
過去を眺めるには最適だ

「フラッシュ撮影はご遠慮下さり」

## ◆濁流丸

黒田ナオ

ごろごろと  
濁った水が  
どぶを流れて  
歩くのも  
めんどくさいから  
どぶに飛び込み  
泥水と一緒に流れていたら  
すぐそばにある坂道を  
夫と三人の息子  
合わせて四人の男たちが  
にぎやかに  
喋りながら帰ってくる  
それでもまだまだ私は泥水の中  
男たちは  
自分の妻と母親である私が  
流れてくるとは

夢にも思わず  
笑い転げて  
ごつんごつん  
私は背中を石ころにぶつけ  
それがまたちようど  
ツボに当たって気持ち良く  
いいないいな  
ぬるい水にまみれながら  
渦巻いていると  
晩ご飯はピザを取ろう  
楽しみに  
誰かが声をあげ  
そうですか  
それはどうぞどうぞと  
答えてはみても  
流れ流れる私には  
もはや手も無く足も無く  
ただの石ころと成り果てながら  
それでも  
明日の弁当のおかずは  
唐揚げと卵焼きにしようかなんて  
やっぱりどこかで考えている

## ◆Meditation de Thais

福田知子

クラシック音楽を聴きながら現世に佇んでいた いつか  
いつの日だったか： 忘却の日々 繰り返しながら過ごすいつ  
かのあるとき  
水の皮膚 それら一枚一枚を捲って――  
あなたの大好きだった立命館 東門の南に音楽喫茶むじーくが  
あり  
授業を抜け出して聴いていたあいねくらいねなはとむじーく  
ずっとモーツアルトがかかっている――

作品20の1の中から不意にやって来る奇妙な実在  
落ち葉を巻き込みながら螺旋に舞うバイオリンの鮮やかに澄ん  
だ音色  
ことし 秋の紅葉はたましひを送りきるには鮮やかさが足りない  
あかいTシャツが似あっていたね  
古びた文学部の校舎 二〇〇二年の夏休みのすこし前  
教室の長い机に汗ばみ並んでナカガワセンセの授業を受けた  
そこにいる  
まだわたしはそこにいる  
絶え間なく流れているこれらいくつもの美しい調べが やがて  
タイスの瞑想曲にかわっても  
そこにいる  
そこにいて水の皮膚を捲り続ける

ツイゴイネルワイゼンの軽やかなステップや  
地に舞う夢や一縷の風を蹴散らしながら

\* Meditation de Thais タイスの瞑想曲…ジュール・マスネが作曲した  
歌劇『タイス』から第二幕第一場と第二場の間奏曲。

## ◆ 詩の風景

月村香

黒いマニキュアで誰かの死後に立ち会ってきたその誰かとはわたしである白い布の上アメジストの粒があまりにも小粒にして冷たいやけどを負って痛くて泣いていた氷で冷やさなければならぬところをアランを探しに行った読めなかつたわたしは死んでいたから娘らは生娘だったので紺のマニキュアをしてわたしの胸の上をポンポンとたたいたお別れにいい子いい子と言ってそれからおもむろにわたしの気分を変えようと除光液で黒を落としピンクのベースコートに塗り替えたわたしは何だかそこから生き返ったように静かな笑みを浮かべたらしいそんな声が聞こえたからああ詩と言うものは

## ◆ まぶた

大橋愛由等

詩碑に棲んでいるそのひとは虫ではない。ときどき詩碑に刻された碑文を独りごちている（きまぐれな時間に）。だれも気づいていない聴いていないとの思い込み。ぼくはあなたを知っていると目配せ手配せしてみる。午後三時三七分（でもそのひとは午睡しているだろう）。そのひととぼくはときたま眼が合う。まぶたがないのかぼくを凝視しているだけ。あなたの声は守宮のようにとても素敵だ、と詩碑を通るたびに褒めている。そのひとは碑文の文字以外きつとなにかしゃべり出すだろうと決めつけ、小春日に詩碑の横にたゆたっていた。その日はいつもとちがいに石をこすりあわせるようなくもった声。碑文を読み終わったあと、ぼくは詩碑を見つめる。碑文以外にかしゃべるだろうとぼくが期待していることはそのひとにも伝わっている（はずだ）。ながく閑かな耐えてもいい沈黙。陽が上がる。なにもしゃべらない。このひと、虫ではなく地被植物なのか。黒鳩が詩碑に飛来して首を二三度傾げ飛びたつていった意味ありげだ。つむじ風がすこしためらったあと（すぎてゆく。青いハンカチーフをひろげ詩碑にかざして振ってみる（巫覡のように）。持参のスコッチウイスキーをひとくちあおる。ひよっとしてぼくには聴こえないかもしれないので短波ラヂオをさぐる。語りはない。そのひとのことを想った。なにか空想にふけっているのだろうか。あるいは気鬱。碑文以外の作品を詩碑に貼り付けて覚えてもらおうか。ウイスキーをもうひとくち。詩碑があるその場所から人通りが消えたその時のこと。詩碑からなにか音が聴こえてくる。擦れたような切りぎむような音。そのひとがなにかをしようとしている。碑文を変容しようとしているのだろうか。夜の雲たちが歌いだす時。



## ◆時間の行進

大西隆志

壁を見ていた  
テーブルを前にして  
椅子に身体を沈ませ  
壁面に眼を走らせていた  
時間を見ていた  
十年前、三十年前か、それよりは前なのかもしれない  
音楽が鳴っていた  
ギターの響きだったような  
四十三年前の夕方で  
本格的な紅茶なんてまだ飲んだこともなかった  
一九七三年のサンティアゴが壁の地図にピンで留められて  
いまに繋がっていたようだ  
仕事を始めて二年目になる時間があらわれている  
ビクトル・ハラが殺られ、スタジアムには多くの若者が沈められ  
ていた  
チリだけではなく、世界には大国から支援された軍事政権が  
壁のシミのように浮かび上がっていた  
動きまわる紙魚は言葉を食い散らしていたが

## ◆雨を見たかいくヶガをしたはなし

富 哲世

ほつたらかされていのちで  
頭にケガと傷を背負ってしまった  
ちがう意味でかわいがられ過ぎて傷を受けた亀みたいただ。  
ばすからおりて  
右腕にしょいヒモをはすかいにとおそうとして  
よろよろと他人の家に突き当たり  
ときがいまにへひっかかってしまったのだ。  
だれも見えていなくていい世界のなかで  
風を巻いて  
ひよろひよるとばくだんは降りつづき  
膳を措き  
炎を巻き込み  
誰かが飛び込んでいく火の柱のなかを  
過去がどわうどわうと露出してしまったのはまるで  
なにかの間違いでいまだけが煌々と生き延びているかのようだ。  
血も骨も  
そのようなものだ。  
納骨堂も。  
門松も。  
そしてあすもまた接ぎはぎをはりなおさなければならぬあたら  
しいあしたがあると思うと

自動小銃は人の血をあちらこちらに飛び散らしていた  
血痕のテーブルクロスでの午後の紅茶  
そして地球儀を覆い、画布は頸部を裂くナイフで切り裂かれている  
覆いつくされそうな、善良なるヒトの暮らしを  
ボウリョクとカネでバランスをとろうとするのか  
二十年、五十年、いや七十年、押して、押し続け  
熱狂の旗ではなく、ボロ切れの言葉で、右往左往は結構  
前にも後ろへも進め、ステップで進め  
当時のぼくらはロックミュージック列車に乗っている  
ローマ法王ヨハネ・パウロ二世へのチリの少年のメッセージ  
長い沈黙のあとの言葉は、社会正義の必要と不平等を破ること  
法王も鳥のように両手を広げて、言葉を進めた  
時間がパレードを始める  
貨物列車に詰められた声が、車輪の音と響き合う  
収容所行きのレールと帰還兵のレールが交わる  
ぼく、ぼくらの時間は  
ガラスの窓枠をひっくり返しなが  
ズレた場所に屹立している  
外は寒気団の影響で氷点下  
ここが暖かいのは嘘だよ  
室内に流れ込んでくる時間  
世界は寒さに震えているのだが  
言葉を手にして投げる  
時間に沈み込んだ死者の思いを拾い上げ  
両手で花を捧げるように  
言葉を隣のヒトに渡す

絆創膏をあてがわなければと思うと  
なんだかほんの少しありがたくもなる  
ククそれは詩だ  
やることらしいやるべきことがそれでもまた埋れていたた。  
からかもしれない  
からかもしれないはずが  
それもまたすぐにうつつとうしく  
ぬれ雑巾みたいに  
わが子をかわいがるのか  
いたいたしくて  
嫌になるみたいに。  
そんなときは自分の声に似せて  
いやだと言ってみる。  
自分の夢を食いやぶる  
こどもつてにわとりみたいやでいややなあ  
バランスわるくてどうしようもなくついでいややなあ意味なくゲ  
ンする。  
深い意味はない。  
うぶ声はもう遅い。  
降りつづく  
まんじゅうかいじゅう  
ばくだんかいじゅう  
夢を食いやぶる  
くそゲームめ  
ぼくらはみんな廃工場の路上で  
悪夢のベッドの上で業火に焼かれ  
うつ向きゆうべのそらを見上げ  
嘆きあげて地図を失くして。

## 中堂けいこ

春…むらさき色の芋虫  
 夏…ハチャトウリアンによる禿山の一夜  
 秋…グツナイグツバイ  
 冬…消えたチビクロサンボのバター

素敵なクリーム色の斑の入った蔦をみつけたわたしはその春先につる先をつまんでポケットにしのぼせ、ぬすつとの円い花壇に植え込んだものだったが、その次の春先にその斑入り蔦にむらさき色の糞をみつけとうとうむらさき芋虫がやってきたことを知ったのだった。むらさき芋虫はむらさき色の糞を春先に斑入り蔦を食べながら丸い花壇をむらさきいろに染めるのだった。わたしはサンダルのかかとで彼らを退治しなければならぬ。夏になる前に、春が終わる前に、ぬるぬると踏みつけねばならない、ならない、芋虫はころころがりながらサンダルのつま先から脱げるのだった。

だからいわないこつちやないよ、八十八回転の赤茶けた紙封筒から、そもそも無理なのだ。四角い紙袋に丸いレコードを入れ込むなんて。大人の目を盗んで炭素繊維のレコード盤を取り出し、テーブルの中心にさしこむ。ここからとても難しいのだ。震えてはいけない、いけない、だが不穏なヴァイオリンの旋律が響く頃にわあつとわあつと、ハチャトウリアンがぶりむくのだった。ギン！と切れた盤のその中心で冷たい風が吹きまぐる。

丹波栗は冷蔵庫で冷やして、一ヶ月ほどしてから栗剥きハサミでむきましよう。わたしの爪が柔らかくなつてしまつてあの硬い殻を思い浮かべると、そう思うだけでわたしの爪は剥けてしまうのだ。栗より先に剥けるのは空想であつても冷蔵庫で冷やされすぎて丹波は凍り付いて長い眠りについている。もうわたしには食べることはできません。だからさようなら。マロンちゃん。

例のトラはまだわたしの家で過ごしているのだけれど、誰にも知られずにトラと暮らすのはなかなかリスキーなことではある。だがサンボはトラの餌になるのにチビとクロとまたチビとクロで、差別用語扱いになつて岩波絵本から永久追放されてしまったのだ。いや、トラは椰子の周りを回り続けてバターになつて、わたしはトラは食べないがバターを食べる。サンボにグツバイといえなかった、腹いせに、トラは黄と黒をいかせている。

## ◆ きんかん

高谷和幸

きんかんのみを貰つてきて机の上に置いてみた。きんかんとは母型の過剰なかさなりにほかならないのではないかと思う。黄色い表面をしたきんかん(ガラス瓶の透明さ)は「亜」の密度が母型の投射詩法で、ガラス容器の内側から温気で世界をくもらせている。しかし(中間にある宙層の地平を担保にした「大地に忠実であれ」のはなしであつて、ガラス質の地層は失敗した大地ということになるだろうか)とは(思うか思わないかのこと)の地平の「転回」(さえも)が絶滅したあとの地層が「黄色いガラス質」なのだ。それが過剰さでくもるときがある。あなたよ。「しにはなの世界で、あやつめ蜂蜜採りでめがしらがにじんではいまいか」と語り(星辰のアナグラムとなつてもかなしさは変わらないね)。あれから。おと(し)あなのような生き延びかたをしていつのまにかわたしがいる。が問題はむしろ見えない人型の「蝸集」とシンクロしてしまふドッペルゲンガーがガラス瓶の内側をくもらせることだよ。となりのA地区(豚まん小国家を買う彼らについては後刻報告申し上げるとして)から声があがった移民の住民投票の失語症がみじまいをしている。デスクプレイを見ながらわたしはポップコーンを指で食べた。みんなで指で食べた。べたべたとした皺のよつたきんかんの木の下のかべを訪問した猫が帰つてきて目が合う。色彩密度の高すぎる街並みの老朽システムとともに住民と猫は新しくあゆみはじめているのだった。「黄色いガラス瓶」の内側にひとが次から次へとあふれている。それでも母型はきんかんをはさんで語られる。猫を指さして「あれがイリヤ」とね

## ◆雪虫の見舞ひ

高橋雅城

冬 二十句

冬に入るしばし泣くのをおよしなさい  
暗殺は冬に入りては他人事  
人の子をマントに隠し駆け去って  
三宮わかればなしに降る雲  
雪女中島みゆきの歌ですか  
冬の雷ルイ・アームストロング泣く  
エマニエル婦人の湯ぎめクスクスと

八畳間火鉢ひとつというお客  
逝く人もあり寒かろうとは大仰な  
雪虫の見舞ひて人は逝くらしく  
離人症病みてまいまい雪虫よ  
煮凝に沈んだ魚の不機嫌な  
今川焼モダン焼ポストモダン焼  
仲直りなら鯛大根が知っている  
焼諸をほおぼるアンパンマン飛んだ  
小雪や右翼の街宣車を通る  
浮寝鳥にも休日のあるらしく  
霰降るパンシロンでパンパンパン  
羽田線今日のおはよう浮寝鳥  
底冷は嫌だ遊んでくれないし

テロ 十句

冬薔薇未成年には早すぎる  
未成年塗りて白き冬薔薇  
セロファンの中の冬薔薇が未成年  
セロファンの中の冬薔薇萎え未成年  
未成年その身を斬って冬薔薇  
未成年掴めぬ冬の薔薇かな  
冬薔薇散らすがままの未成年  
冬薔薇咲くとも未成年の元  
未成年叫びとどかず冬薔薇  
冬薔薇未成年なら先ほどに

## ◆悪寒

中嶋康雄

毛むくじやらがコーヒーを飲んでいる  
外で学級閉鎖になった小学生が騒いでいる  
珍しい蛾が壁にとまっている  
じつとしていて  
突然消えてなくなる  
銀行で振り込みをする  
振込先の口座がウイルスに喰われている  
ウイルスが現金自動預払機の画面にふつつつ現  
れる  
指を這い上ってくる  
電車は途中で消えてしまう  
半時間待ってやっときたと思ったら  
口の中の綿菓子みたいに消えてしまう  
乗客がバラバラ線路に落ちている  
乗客はなぜか無毛全裸だ  
蹲りただぶるぶるとふるえている  
句読点が東京へ行きたいという  
大阪でもかまわないという  
句読点のくせにと  
怒鳴りつけると消え去り  
ウイルスがその隙間に入り込む  
ねばねばしたものが口を塞いでいる  
邪が飛び交い預金口座から金を吸いとる

ウイルスのせいにして  
銀行は空気に逃げ込む  
ああ、おかあさん  
お金が逃げます  
泣いて泣いて電話する  
ウイルスが電話の言葉を消してしまう  
迷路が湧いてくる  
迷路に意味はない  
迷路が胃をせり上がってくる  
迷路を嘔吐する  
悪寒が全身に行き渡る  
慣れっこになる

## ◆野菜市

中嶋康雄

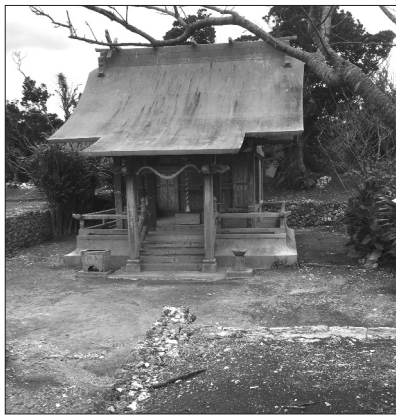
大根の欠伸  
嫌気が差すのは  
いつものことで  
屁の足取りの爺さんが  
涎をたらす

自転車のサドルは  
白い糸を引く  
かさかさの指の間で  
揺れているほうれん草  
かごの中には  
ビニール袋が波打って  
腹を空かせて  
嗚咽をあげる  
野菜市がまた立つ  
急ぎの交差  
今日は白菜鍋をする  
ゴロゴロ転がる  
負けの論理の容赦なき  
君の自転車が溶けている  
庭で朝から鳥が柿を食う  
出掛けても鳥の鳴き声  
頭に居残り  
公衆便所の残酷な切れ端  
半分だけ閉ざされている  
ジャガイモの芽の暗黒  
いつもの屁の爺さんが  
そつと囁る  
歯形の血糊  
よろよろと  
屁とへモグロピン  
締め直す  
年の瀬  
牛蒡のよろめき  
野菜市



# うた 神戸詞あしび

98-2016.01.31 大橋愛由等



沖永良部島和泊町にある世之主神社

一見すれば、どこにでもありそうな神社である。ちがつているといえ、台風襲来地であるために、木造ではなくコンクリート造

りであるということだ。一月十九日、沖永良部島にあるふたつの世之主神社を訪れた。まずは、知名町にある世之主神社。一五世紀にこの島を統治していた世之主が生まれた場所に建てられている。世之主は、琉球がまだ三つに分かれていた時の北山王国(現在の今帰仁)が中心で沖繩本島北部を支配下に置いていたの次男と言

## 六〇〇年忌を祀られる世之主という存在

われている。北山と沖永良部島との文化的関係は深く、方言もこの両地域は同じ言語文化圏に属している。

そしてもうひとつの世之主神社は、和泊町にある。ここは世之主の居城跡といわれている。樹木がうっそうと茂る場所であったのが、去年発掘調査のために、樹木を伐採したところ、そこが本格的な構えをもった城郭であることが判明した。つまりここはこの島を統治する為政者の政治的、軍事的拠点だったのだ。小高い丘に立つここからは、北の徳之島と、南の与論島が視界に入るなど支配する者にとって好立地なのであった。

奄美の神社はどこかのびやさがある。天皇神道とほとんど

無縁であるからだ。つまり祀られている神々が、天皇家の祖先、あるいは神話に登場する神々の系譜につながっていないからである。一方、奄美の島々にも天皇神道・国家神道とつながる神社は存在する。明治以降、奄美の島々に設置された高千穂神社である。もともと鹿児島本土の郷社であったのが、奄美群島民に天皇崇拜を徹底させる装置として建てられた。その神社が位置するのは、その島、その地域の神だかい場所である。こうして企図された神社は、戦前の朝鮮・京城(ソウル)にあった朝鮮神宮も参考にしていいだろう。つまり神社(神宮)は、帝国日本の宗教戦略の一環として植民地(皇化に浴しない)に設置されていたのである。

今年はその世之主が死去して六〇〇年となる。その時、沖繩本島を統一した中山王国が、北山王国の領地だった沖永良部島へ一四一六年に軍隊を派遣してきたのである(二四二二年節もある)。その時中山は和睦を前提に交渉するつもりで軍隊を派遣してきたのだが、それを船の帆の色で伝える者が間違ひ軍事侵攻をしかけたとすると色という色の帆を掲げてしまったことを受け、世之主は自害してしまうのである。

和泊町は世之主没後六〇〇年を記念して文化イベントを企画しているという。ヤマトの六〇〇年前といえ、室町時代である。はるか遠い昔のことと思えてくる。和泊町はなにを意図してこの記念祭を開催するのだろうか。

奄美には独自の歴史区分があり、奄美群島が琉球王国の支配下になった時代を(那覇世)と呼ぶ。南から時をかけて制圧していき、最後の喜界島を支配下に置いたのが一四六六年。あしかけ五〇〇年をかけての戦いであった。歴史というのはつねに語るそのときの時代の視座が立地点となる。とすれば今(世之主六〇〇年忌)を位置づけようとするなら、沖永良部島にとって(那覇世)という時代を総括し、いまの沖繩との関係を再考する機縁にすることになるのだろうか。

(余談だが、世之主を島でささえた沖永良部島の按司(在地豪族の一人)に後嗣八がいる。その子孫は平姓を名乗っている。いまテレビのバラエティ番組に出演しているタレントの平愛梨はその一族である。)

詩と評論  
月刊「Mélange」Vol.109  
神戸

2016年01月31日 通巻109号  
発行所/月刊「Mélange」編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通1-7-1 2F  
編集・発行人/大橋愛由等(「Mélange」同人)  
maroad66454@gmail.com  
定価600円(税込)